東京家政大学

女性未来研究所　公開研究会

日時：平成 30 年 10 月 11 日（木）　16:10～16:40

場所：女性未来研究所

第 5 回

「バングラデシュ農村部の女性の出産と子育てについて」

南アジアに位置するバングラデシュは、全人口の 19%の人が 1 日 1.9 ドル（国際貧困ライン）以下で生活をしており、後発開発途上国のひとつとして数えられている。UNICEF の保健統計によると、乳児死亡率、5 歳未満児死亡率ともに改善してきてはいるものの、妊産婦死亡率 176（出生 10 万対）、乳児死亡率 28（出生 1000 対）、5 歳未満児死亡率 34（出生 1000 対）と依然として高値である。

妊産婦死亡の多くは出産時の出血が関係しており、その背景には女性の地位を含めた文化・慣習が関係している。加え、バングラデシュの 5 歳未満児死亡の 2 大原因として、下痢による脱水と急性呼吸器感染症（Acute Respiratory Infections）があげられている。低出生体重児出生率が 22%、5 歳未満児のほぼ 4 割にあたる 36%の子どもが中・重度の低体重であると報告からも、この結果は、その他の開発途上国と同様、低栄養状態が 5 歳未満児死亡の根本にある事を示唆している。

筆者は 2002 年から約 2 年間独立行政法人国際協力機構（JICA）青年海外協力隊助産師隊員として農村部の NGO に派遣され、その活動でフィールドワーカーらとともに行った診療所巡回を行った。今回は、協力隊時代に行った妊婦健康診査のデータと、その後の母親たちの子どもの栄養に関する認識に関する調査をもとに、農村部の女性の出産と子育てについて話をする。

東京家政大学　健康科学部　看護学科　准教授

大久保　麻矢